

小学校体育における学習評価の困難性に対する教師の思考プロセス

森田奈々子（宇都宮大学）

1. 目的

本研究では、教師が新学習指導要領（2017）における体育の観点別学習状況の評価に対して抱えている困難性をどのようにして乗り越えていくのかという思考プロセスを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：教職経験年数が10年以上であり、新学習指導要領下で体育授業を行なった経験がある小学校教師6名
- 2) 調査方法：2021年11月下旬～12月中旬にかけて、オンライン会議アプリケーション（zoom）を用いて1対1で半構造化インタビューを行なった。
- 3) 分析方法：佐藤（2008）の質的データ分析法を用いて、コード表及びカテゴリー表を作成した。

3. 結果と考察

分析の結果、以下の5つのコード、3つのカテゴリーを作成した（表1）。

表1 コード・カテゴリー一覧

カテゴリー名	コード名	コードの特徴
〈妥協する〉	【他者と協調する】 〈3事例〉	自分と他者の意見が異なるが、同じ学年団で足並みをそろえていかなければならないため、他教員の意見に追従する形をとる。
	【自分の中で折り合いをつける】 〈12事例〉	その方法が最適ではないということを認識しているが、他に方法が見当たらず、代替案を用いたり、自分の中で折り合いをつけたりして乗り越えていくとする。
〈試行錯誤する〉	【規準をよりどころとする】 〈2事例〉	新学習指導要領の新しい評価観点に対して理解が不十分であっても、学校単位や地区単位で作成される年間指導計画等の規準をよりどころとして、ある程度の方向性を決定する。
	【オリジナルアイデアを試す】 〈10事例〉	良いかどうかはわからないが、オリジナルの方法を試してみても課題を乗り越えていくとする。
〈他者と協働する〉	【他者と協働する】 〈7事例〉	自分ひとりで解決することは難しかったため、力を借りたり、貸したりして、他者と協働して課題を乗り越えようとしていく。

1) カテゴリー同士の関係性

3つのカテゴリーの関係性を図1に示した。

教師は体育の学習評価に関する困難性に直面した際、まずは自分で試行錯誤したり他者と協働したりしてその困難性の解消を図る。しかし、根本からの解消が難しいものもある。環境や他者の意見、今の評価システムの在り方等が自分の大切にしている評価観と一致しない際、それは教師にとって解消しがたい困難性となる。しかし、最終的には成績を出す

というタスクが教師には待ち受けているため、最終手段として妥協せざるを得ないことが示唆される。

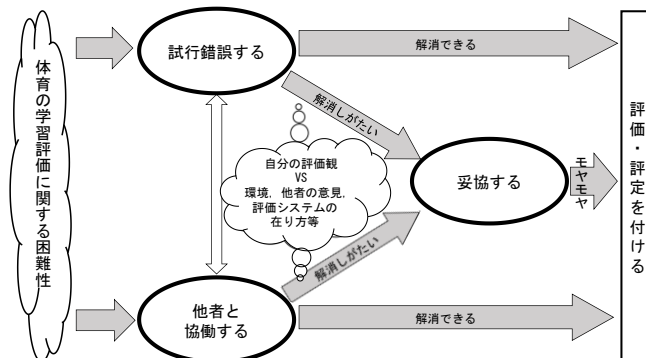


図1 カテゴリー関係図

2) 教師が望んでいることについて

対象者の語りから、学習評価について広く他者と意見を交わす場を求めているということが分かった。オンラインで時と場を問わず簡単に他者と繋がるのが可能な今、教師の交流の場を増やし、互いの評価観や評価方法等を共有することで学習評価の困難性の解消に繋げることができると考える。

また、「評価がなくなしてほしい」という語りも見られた。教師の中には子供たちの頑張りを観点別のABCという数値に表すことに違和感を抱いている人もいる。しかし成績は出さなくてはならないため苦渋の決断の上で妥協をとる訳だが、もしこの「数値でつける評価」の在り方が変われば、教師がもっと子供たちの学びを評価しやすくなると考える。

4. 結論

本研究では、教師は新学習指導要領に限らず学習評価に多くの困難性を抱えており、それを〈試行錯誤する〉、〈他者と協働する〉、〈妥協する〉といった方法で乗り越えていることが明らかになった。困難性の中には根本からの解消が難しいものもあり、試行錯誤したり他者と協働したりした上で、それでも解消が難しい場合には、最終的に妥協せざるを得ないこともあると分かった。教師は日々自分の中の評価観と現実とで葛藤し、困難性を乗り越えていこうとするのである。